
歯ブラシを捨てよう！

葵さくらこ！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歯ブラシを捨てよう！

【Nコード】

N2157L

【作者名】

葵さくらこ！

【あらすじ】

失恋の傷から抜けきれない主人公。ゾウとパンダとライオンと。新しい恋は動物園で芽生える？？

空はいつだって脳天気過ぎるんだ！

空は気まぐれに晴れて、気まぐれに曇る。

そして思い出したように雨を降らせる。

そこに一喜一憂する必要もないし、晴れ男、晴れ女なんてモンですら、単なる迷信だなんて事はとくに分かってる。

それでもあまりにも青い空は、なんとなく考えさせられるんだ。

いい事も、悪い事も。

彼女がいた頃は、天気など考えなかった。晴れても眠い時は寝てたし、出かける時は出た。

「天気いいよー」と言われても、「ふーん」とだけ答えて、部屋でごろごろしてた。呆れてコンビニに行かれたこともあったが、僕らの時間はそんな感じで流れていた。

ゆっくりと。

お日様の光を気まぐれに浴びて、なんとなく流れていた。浪費していた。

彼女が部屋を出てから、逆に僕は空を見上げるようになった。

晴れてるなあ

曇りだなあ

それで僕の行動が決まるというワケではない。

だけど、なんとなく眺めてしまう。

思い出したいんだ。あの頃の欠片を。

僕がその日動物園に出かけようと思ったのは、台所から彼女の古い歯ブラシを見つけたからだ。ピンクの歯ブラシ。女の子用の歯ブラ

シ。彼女がウチに泊まる事になった二度目の夜、途中寄ったコンビニで僕が薦めた歯ブラシ。

真新しい歯ブラシに歯磨き粉をつけて手渡した時、にっこり笑ってありがとと答えた。

そしてにこにこ笑いながら、ふたりで歯を磨いた。

二晩目の出来事。

この歯ブラシはもう役割は終えてしまった。

歯ブラシは別の用途への再就職の予定もなく、今はただ、キッチンの引き出しの奥でひっそりと眠っている。

僕はひとり、日の光が差し込むキッチンで、そのピンクの歯ブラシを眺めた。

ぼんやりと。

捨てられない自分を、脳天気なまでにまぶしい日の光が責めて立てるような気がした。それは過去だ。もはや遺物だ。

だけど僕は、その限りなく天文学的にゼロに近い、彼女がもしかしたら戻って来てくれるかもしれないという可能性を、今だ捨てきれずにいるのだと思う。

ありもしない現実。

居心地のよい空想。

都合の良い空想。都合の良すぎる空想。

そんな事、あり得ない。絶対にあり得ない。

ただ、捨ててしまえば、全てが消えてしまうような気がするんだ。

ここにあるという現実だけが、僕と彼女との思い出や日々を、単なる夢や空想と隔ててくれている。妄想とは違う、手触りのあるリアルな現実として。

僕はまだ消したくない、消し去りたくない。

それが出来る程、僕はまだ大人じゃないし、そこまで強くない。

そして時間という地層は十分に積もっていない。まだリアルなんだ。
”彼女がここにいない” という重苦しい現実が。

（続きます！）

ライターの火、そして空。

僕は身支度を整え、表に出る事にした。身支度といっても簡単なものだ。ジャージから、ジーンズに履き替え、乱れきった髪には適当な帽子をかぶった。

それだけの事。

それだけの事なのに、僕は外出を避けていたように思う。外に出ると彼女の思い出が多すぎるんだ。

駅の改札。

彼女が見えなくなるまで、必ず見送っていた改札。

その改札も、4月に工事が入るといふ。

再開発という名の元、真新しい駅ビルに作りかえられてしまふ。思い出も精算しなさいとでも言わんとしているが如く。

別れ際、一度お別れをして、手を振って、見えなくなる直前にもう一度振り返って手を振ってくれるのが、いつもの彼女の姿だった。僕らの恒例だった。

別れた最後の日だけ、彼女は振り返らなかった。

ただ、それだけの話。ずいぶん昔のように感じる話。今の僕自身とは切り離された別の世界で存在していた『無意味な出来事』のように感じる話。

僕はひとり電車に乗り、動物園に向かった。

僕は彼女との思い出を追体験しようとしてる自分に気づいた。僕が歯ブラシを目にして、動物園に行く事を考えたのは、彼女に近づきたかったからだ。もう居ない彼女、その幻影に近づきたいと思ったからだ。不毛だという事は自分でも理解している。無意味だという事は分かっている。

それでもそうしたかった。そうでもしないと壊れてしまいそうだった。

気持ちワリイな―

分かってんだよ！そんな事！

ただ、いいじゃないか別に！そのくらい、無害だよ！一日くらい好きにさせてくれ！

電車の中では逆に孤独を感じる。自動改札を通り、携帯で時刻表を確認し、最短で進む。途中、誰とも口を利く事もない。

僕はひまつぶしに用意した文庫本をぼんやり眺めた。文字を追っても、頭には何も入らない。無意味な抽象な羅列に見える。

そして窓の外は相変わらず脳天気　　”青”　　だ。

全ての街中のコントラストを強め、柔らかい空気に包んでいる。それが僕にはハナにつくんだ。全てを強引に幸せ色に染めようとする青空。

僕はその空に多少の嫉妬すら感じる。

この強引さが、僕の心にもあれば、どれだけ楽なのだろう。

僕は洞穴から出られない動物のように感じた。

彼らが洞穴から見る日の光と、僕の部屋に差し込む日の光とは、そこまでの大差は無いのではないか？そう思えた。

上野までは、二回乗り換えれば着いてしまう。その程度の距離だ。

僕はその程度の距離ですら、あまり足を運んだ事がなかった。パンダに会いたい！パンダに会いたい！を彼女に繰り返された結果、ようやく重たい腰をあげて数回向かった程度だ。

もうそのパンダもない。

一昨年死んだからだ。僕は主のいないパンダ舎の前でぼんやりとしていた。

最後にここで見たパンダは、すごく年老いて見えたが、それでものんびりと幸せそうに見えた。まるで愛されて年老いた老婆のような、柔らかい安らぎの表情がそこにはあった。のんびりササを食べ、ころころ寝転がるパンダ。

寝転がるたびに、皆が歓声を上げる。

今、そのパンダ舎で立ち止まる人は少数だ。もういないのだから。

僕はそこで、彼女の嬉しそうな表情を思い出した。「パンダー！」と子供のように声を上げる彼女。僕はその時、やれやれと、気にも留めなかったように思う。数年後、この気にも留めなかった瞬間を思い出すなんて、その時は想像すらなかった。

僕はその場を離れ、煙草に火を点けた。そして空を見上げた。

あの時の幸せな日々は、今のこの辛さを与える為ですか？と僕は空に聞いただしてみた。

その質問は単に吸い込まれるように空に消えていった。当たり前だ。

少し気がラクになった。

僕は視線を下に戻した時、小柄な女の子がそこに立っていた。無表情だけどかわいらしい服装をしていた。

その子は何も言わず、僕の顔を見つめ、手でライターで火を点けるジェスチャーをしていた。

見ると彼女は口に煙草をくわえていた。

「どうやら」火を貸して欲しい」、そんなところのようだ。

「あ、火ね。」と僕は言つて、ライターを差し出した。

ただ、ライターはガスが切れかけていた。

なかなか火がつかない。僕はその子に少し近づき、ライターと煙草の回りを手で覆ってやって、ようやく火がついた。

彼女はペコツと頭を下げ、そのまますたとどこかへ行ってしまった。

僕は適当なベンチに座って、ふたたびぼんやりしていた。何をして

るんだろ？何をやってるんだろ？家に帰ってもすることないし、ここに居てもする事ないし。

とりあえず脳天気な空を見上げた。目線いっぱい青空。

少しだけの雲。

青と白だなーと、ぼんやり拡がるその視界の中に、にゅっと彼女が入り込んできた。

手にはカップに入ったコーヒーがあった。

そして僕に差し出した。何も言わずに。

”あげる” という事のようにだ。

僕はそのコーヒーをありがとと言って受け取った。温かい。ライターのにおいだろ？僕はその日、初めて人に触れたような気がした。初めて口を利いたような気がした。

ただ、僕は少し彼女に対して不自然さを感じた。無口な人。だけど

単なる ” 無愛想な人 ” には思えなかったのだ。

「もしかして喋れない？」僕は口に出して聞いてみた。

違っていたら、大変に失礼な発言だ。ただ僕は直感的にそう思ったんだ。

彼女は自分の口の前で人差し指で小さな×を作った。”喋れない”間違ってたなかった。

更に、彼女は自分の耳をトントンと指挿し、同じように指で「×」を作った。

”耳も聞こえない”

…そういう事のようにだ。

僕の直感は間違ってたなかった。

暫くの沈黙が走った。僕が今まで経験したことのない状況だからだ。

僕は「ありがとう」という事を伝えなかったのだが、なんだか上手

く伝わらないような気がした。

ひとまず、声に出して ” ありがとう ” と言ってみた。

彼女はある程度唇を読めるようで、それなりに笑顔で答えてくれた。

ただ、それでもまだ不十分な気がした。

紙に書こう...といっても、紙なんて無い。ペンも無い。

僕は携帯電話にありがとうと打って、それを彼女に見せ、そして大げさに頭をブンッブンッと二回下げてみた。

その大げさな動きが彼女にはおかしかったのか、声には出さないものの、おなかを抱えて笑った。

そして彼女も携帯を取り出した。

「お一人ですか？」

そう書いてあった。

僕は「ひとりです」と打って、それを見せた。

「じゃご一緒にいかがですか？動物園めぐりを！」と携帯には書いてあった。

僕は「もちろんです！」と打って、それを彼女に見せた。

脳天気なお日様の光が僕に少しでも味方し始めたような気がした。

気のせいかもしれんが。

（続きます！）

雲。

「不幸そうだから声かけたw」と次のメールには書いてあった。

僕らは毎回お互いの携帯を見せ合うのも面倒だという事で、メールアドレスの交換をしたのだ。お互いの会話はこのメールで行うと。

それにしても、へ????オレってそんなに不幸に見えた??

僕はそれを送信した。

「うん、不幸に見えたw不幸を体全体に背負った男が、空に話しかけてたw」と彼女。にこつと。僕を見て笑う。

僕は苦笑いをした。

「だろうねw」と彼女。

「ひとりで動物園に来る男なんて二種類だけ！失業中の中年と、失恋後その思い出にひたる男ぐらいw 君は後者！だから声をかけた！」と再びメール。

当たってる。

基本的にここは幸福な人が訪れる場所。家族、カップル、幸福じゃない人は例外。僕はその例外の中のひとりだ。

「ちょっと天使でしょ？」と彼女。

そうだ。ちょっとだけ天使だ。ありがとう。

「君は何の為にこの場所にいるの？」僕は聞いてみた。

彼女は体に不釣り合いなサイズのカバンを背負っていた。全体的にかわいらしい服装をしてるのに、カバンだけがいやにゴツく、そこだけが「男物」だった。

栗色の長い髪が風になびく。そしてふわふわした一枚布のような大きめの生成のワンピースを着ていた。着ているというより、身に纏っているような感じ。

時折吹く風に、やわらかに揺れる。小さな風をとらえ、そのまま浮かび上がりそうな感じ。

スカートの裾は斜めに不規則にカットされ、そこからよく手入れされた仕立てのよさそうな長めの茶色いブーツが見える。

コントラストの強いカラフルな動物園の中であって、そこだけが異空間のように感じた。現実離れしていた。

市販の服ではなさそう。

デザイン科の学生？

一瞬そう思った。それにしてもこの子、歳はいくつなんだろう？学生といえど学生に見えるし、27歳と言えば、27歳にも見える。全体的な透明感。

つかみどころのない不思議な浮遊感と共に、倒れそうな華奢な体が重そうなカバンを支えていた。

そこからこそそつと何かを取り出し、僕に見せた。

一眼レフカメラだ。それもかなり大きめの。小柄の彼女には不釣り合いなサイズのカメラ。

「目的は二つあるの」と彼女。

「ひとつは、写真でみんなを幸せにする事！」

「もうひとつは？」僕は聞いてみた。

「ナイシヨw」

ふーん。

僕はまだ彼女の名前を聞いていなかった。赤外線でメールアドレスの交換をした時、名前の欄だけは、何故か空白だったんだ。

僕は聞いてみた。「ところで名前は？」

「それもナイシヨw」

ふーん。ま、いいや。

雲みたいな彼女がふわりと歩き始めた。

「さ！どこに行きましょうか！」

彼女からのメールが届く。そして振り返り、にこっと笑う。

気まぐれな雲につられて、地中から這い上がったカエルのような…、今の自分をそう思った。

そうだ、季節は春だったんだ。

空は青かったんだ。

（続きます！）

音の無い音。

ふわふわと前を歩く彼女から、再びメールが届く。

彼女のすごいところは、携帯を一度も見ずに、文章作成から送信まで行ってしまう事だ。

彼女は僕の顔を見ながら、ぱぱっと手元で携帯を操作し、そのまま送信までしてしまう。
画面を一度も見ずに。

だから僕は、彼女が口が利けないという事実を時々忘れそうになった。

まるで口の一部のように携帯を操作する彼女。その時の表情、感情が、手に取るように分かった。

「ところで一番好きな動物は？」と彼女。

振り返る。栗色の髪が揺れる。よく揺れる髪。そしてよく笑う。

えー、なんだろ??

… かつ、カメかな。。。。

僕はその通り送信。

携帯を見た彼女は、少し驚いたような顔をして、くすつと笑った。

僕の間を見つめながら、かたかたつ、素早く手元だけでメールを作
って僕に送ってきた。

「カメって渋すぎ！ ふつうあんまりいないよw」

と彼女。ま、そうかもしれない。ミドリガメとか好きだったんだ。

「小さい頃カメが好きでサ」と送った。

「ミドリガメとか？」と彼女。

「そうそう。」

「ミドリガメって、ホントはめちゃくちや巨大化するって知ってた
？正式名称はミシシippアカミミガメ！成体になると30センチぐ
らいになるのだよ！」と彼女。

へー。

「ただ、大半は、そこまでのサイズになる前に病気で死んじゃうら
しいのだ。かわいそうだ。」と彼女。

そうなんだ。

「名前は？」と彼女。

「カメ吉」と僕。

少し笑って「ベタだねーw」と返ってきた。

「ジェニファーとかつけたらヘンだろ？」と僕。

「外国生まれなんだからOKなんじゃん？」と彼女。

「オレ的には外人名つけるとしたらロドリゲスだ！哲学者みたいでいいだろ？」と僕。

「カメはみんな哲学者なんだ！なんか意味深な表情してるだろ？」と送ったら少し笑って、

「呼びにくいから却下！>ロドリゲス」と返ってきた。

彼女はよく喋る。いや、口に出してではないけど。ハタから見ると横にいるのにお互い無言でメールを打ち合ってる不思議なふたりに見えているのだろう。

まあいいや。

「動物詳しいね」と僕は送った。

「うん」

「好きな動物？」

「うん」

「どのへんが？」

「言葉が通じないから」

僕には意味が分らなかった。

「カメ吉君も天国できっと巨大化してるよ！150メートルぐらいに！」と彼女。

それじゃ怪物だよw

「一番好きな動物は？」と僕は聞いてみた。

「一番好きなのは人間！バカな事いっぱいするからw」

と彼女。

ま、その通りだね。 そうなんだよね。

「ちなみみにカメがいる両生爬虫類館はここからだが一番奥なのだよ。そこまで別の動物を見ましよう！」と彼女。

「哲学者好き？」と再び彼女からメール。

「じゃ、白フクロウから始めましょう！彼らも哲学者だから！」と彼女。

「コンドルとかは？」僕は聞く。

「やつらは単なる女好き！頭からっばだからw」と彼女。

「オトコマエはみんな女好きなの！」と彼女は続ける。

なんか意味深だ。

いろんな見方があるもんだと僕は感心しながら、彼女に連れられるがまま、白フクロウのいる東園に向かった。

歩くたび、彼女の髪がふんわりと揺れた。その髪はふわりと宙を舞う鳥の羽のように見えた。

僕はその羽に連れられ、彼女の後に続いた。

やわらかい髪の香りが、新緑のさわやかな香りと共に僕の元に届く。

音の無い音を心で感じながら。

（続きます！）

白フクロウ

白フクロウの前につくと、やっぱり意味深な顔をしていた。

何か考え事をしてるよーな雰囲気。首をかしげてるからだろうか？

「なんか質問してみれば？」と彼女。

「何でも答えてくれるよw」と彼女。僕の目を見つめながら。そしてちよっといじわるそうに。

しばらくして、彼女がちよっと僕のもとを離れ、ゆっくりしゃがみ込み、カメラのシャッターを押し始めた。フクロウを熱心に眺める男の子の後ろ姿。その姿をカメラに納めているようだ。

指先が微妙に動く。さっきまでのふわふわした感じとはまるで違う。指先で微妙な調整をしているのだろうか？

いわゆるガールズフォトのような撮り方とはちよっと違うように感じた。

何かを捕らえよう、その気持ちが伝わってくるような撮り方だった。

神経が指先まで走る。一瞬だが、矢の先端のような鋭さが見えた。

ただ、その鋭さはほんの一瞬で、すぐにまたふわふわした彼女に戻っていた。

男の子が、とことんというか、ふらふらっというか、彼女に元に近づいてきたのだ。カメラに興味を示したみたい。

子供が何か質問してきたが、もちろん彼女はわからない。

そこで彼女は、なにやらカードのようなものを取り出し、それを見せた。

”おねえちゃんね、おくちがきけないの。”

一枚目のカードにはそう書いてあった。不思議そうな顔をする男の子。

”そして、おみもきこえないの。”

二枚目のカード。まだ理解できてないみたいだ。

”けど、おしゃしんはとれるんだよ！”

三枚目のカードにはそう書いてあった。

男の子は最後まで不思議そうな顔をしてたけど、彼女は笑いながらカバンから携帯用小型プリンタを取り出し、手際よくさっきの写真をプリントアウトし、男の子に手渡した。かわいい名刺ぐらいのサイズ。男の子の手にもちょうどいいサイズ。

その写真、

フクロウとその少年が会話しているように見えた。僕には子供がオリの前に立つてる姿にしか見えなかった。そんなごくごくありきたりな光景にしか僕には見えなかったのだが、彼女の切り取ったその一瞬は、立派な作品となっていた。

力を持っていた。

子供は無邪気にそれに喜び、母親の元に駆けていった。

すぐに母親は申し訳なさそうに、「なんだかすみません！ありがとうございます！」「うございます！」と、いやに恐縮していたが、僕が代わりに「いいんです！彼女、写真科の学生で写真の勉強してるんです！」と言ったら、なんだかいやに納得してくれていた。

男の子は母親に促され、お礼を言われていた。子供は素直に、「ありがとおねえちゃん！」と。彼女はそれに笑顔で答えていた。

子供はその写真をしっかりと手に握って、トコトコ歩き出して行った。

「子供の背中が好きなの。」と彼女。メールが届く。

「この先、どんな背中になるんだろって想像するのが好きなの。」と再びメール。

ふーん。

僕はしばらく何も答えずに、そのまま彼女の顔を見つめていた。

そういう事を考えてシャッターを押してるのか。どうなんだろう？

「ところで質問した？白フクロウに？」と彼女から届く。

僕がうんとうなずくと、

「どうせ前の彼女とヨリを戻したいとか、そんなところでしょ？w」といじわるそうな笑顔と共にメールが届いた。

「ま、そんなトコ！」と僕は返した。

「で、答えは？」と彼女。

「”とにかく待ちなさい”…とか、そんな感じw」僕は適当に答えた。

「哲学者の発言なんて、そんなモンだからw」と彼女は笑って答えた。

「役立ちそうで、実はまるで役になんか立たない！」再び彼女。

全く同感だ。

たぶん、答えなんていつの時代もどの状況でも同じなんだと思う。
それをもったいぶって言うのが、哲学者なんだ。意味深なだけ。答えは常に一緒。

ただ、僕らは最強の哲学者、カメに向かって歩いて行こうとしているのだがw

別方向に向かおうとしてる僕達の背中から、さっきの男の子の声が聞こえた。

「ありがとーうー！しゃしんのおねえちゃん！……！」

彼女は振り返って、にっこり笑って答えた。

あれ？なんで分るの？

僕は彼女に質問してみた。

「気配？」そんなメールが返ってきた。

そんなモンか。

（続きます！）

アメリカバイソンと自由。

「トラとライオンはね、対照的なの」と彼女。

僕は彼女に連れられるまま、トラとライオンの前に来た。この二つのオリは隣接している。

共に、食物連鎖の頂点にいるのだが、（ちなみにトラとライオンは生息域が違うから競合してません。トラは主にアジア、ライオンは主にアフリカ）

このこの二種、動物園では、なんだか対照的だった。

落ち着きなく、ひたすら辺りを警戒し続けるトラと、全てに対して関心を示さず、ぼんやりあくびするライオン。

「頂点を極めるとね、神経質になるか、全てに対して無関心になるのかの、どちらかだと思うの。」と彼女。

最後に「たぶんね。」と付け加えられていた。

少なくともオレは頂点を極めた事が無いから分らないや。

ライオンは全てに対して、本当に無関心に見えた。何も気にしない。何も考えない。あたりを警戒する必要がないから、骨抜きになった

のだと思う。ここまで来たら、下手すつと、オレでもこいつらには勝てるんじゃないか？いや、それは無いか。

反面、トラはまるで対象的だった。常にオリのまわりをうろつる徘徊し、外から覗き込む人間をいつも警戒していた。たぶん人間に襲われた事は一度もないと思うのだが、この違いはまるで対照的だった。

「動物園にいるライオンは幸せだと思う？」と、彼女からのメール。

「僕は幸せだと思うよ。だってエサの心配もないし、命を狙われる事もないし。何もしないで、食べ物もらえるなんて、最高に幸せだと思うよ」と僕は答えた。

「百獣の王としてのプライドを捨ててまで生きていても意味が無いんじゃないか？って人もいるよ」と彼女から返信。

「僕はそうは思わない。平穏なのが一番いいよ。」

「さっきの質問はね、その人自身の考え方を表しているみたいなの。ライオンというより、自分はこういう生き方が幸せだと感じるか？って事。君は平穏なのが好きという事が判明！」彼女は笑った。

うん、穏やかに暮らしたい。競争なんてゴメンだ。甘いよね。うん、甘い。

「ライオンよりもつと達観した動物もいるよ」と彼女に連れられ、行ったところは「アメリカバイソン」だった。

アメリカバイソンはアメリカ大陸中をエサを求めて、数百キロも猛スピードで移動するかなり大型の牛科の動物だ。

そのバイソン、移動どころか、この動物園では全く動かない。ピクリとも動かない。剥製じゃないか？と思えるほど、全く動こうとしない。

ただ、動いてしまうと危険なのだろう。何しろ巨大な生き物だ。首にはしっかりとした鎖がつながり、まるで動く事ができないような状態になっていた。

つまり、彼はここで ”生活する” というより、 ”生きた標本” として連れてこられたのかもしれない。

「彼はもう、全てを諦めているように思うの。自由を奪われて。最初は何かがいていたのかもしれない。けど、時間が経つにつれ、それも無駄だと諦めてしまったのだと思うの。全てを諦め、現実をそのまま受け容れた姿が、今の彼だと思うの」と彼女から送られてきた。その横顔は少し寂しそうだった。

「それもひとつの生き方かもしれないね」と僕は彼女に送った。現

状を受け容れる事が幸せにつながる事もある。僕はそう感じたからだ。ただ、目の前にいるアメリカバイソンが幸せとは思えないけど。

「ワタシは諦めないから」と彼女から返信が来た。

そうだ、彼女は耳が聞こえないんだ。声も出せないんだ。メールの送受信でのやり取りに慣れてしまっていたせいか、しばらく忘れてしまっていた。

そして僕は彼女が手にしたカメラに再び意識を注いだ。

「なんで写真を撮ろうって思ったの？」と僕は彼女に質問を送った。

「耳がダメでも、目は見えるから。言葉がダメでも、写真なら伝わるから。」

彼女は僕の方を向いて、にっこりと笑った。重たそうな一眼レフを片手に。

「ただ、どんな生き方するのもひとそれぞれって事だと思うの。現実をそのまま受け容れたい人は受け容れればいい、変えたいと思う人は変えればいい、平穩に生きたい人は平穩目指して進めばいいし、人はそれぞれ選ぶ事ができると思うの。」と彼女は続けた。

その通りだ。僕はただ、平凡でいい。何もなくていい。現状でいい。

「わたしの鎖は二本だけ！残された翼で私は羽ばたきたいの！」彼女のメールにはそう書いてあった。

体に不自由があつて羽ばたこうとしている彼女。何不自由ない体で、何も求めようとしない自分。

人間って複雑だね。

彼女は再び、家族や子供達をカメラに納め始めた。そしてときおり話しかけてくる子供に、写真をたくさんプレゼントしていた。

やがて彼女のまわりには、撮って！撮って！という子供達であふれかえってしまった。

その度彼女はイヤな顔ひとつせず、彼らを写真に納め、それをプレゼントして回る。いまだき写真なんて珍しくないのに。子供にも良い写真と悪い写真が分るのかな？？それとも単なる興味本位か？ただ、彼女もそのヘンは上手いモンで、子供が喜びそうなもの、例え

ばシールとかにプリントしてほっぺとか服とかに貼ったりもしてた。
子供達大喜びだ。

写真で、人を幸せにしたいの！

そういつてたなあ。少なくとも今この半径5m以内は幸せを振りま
いているよ。

彼女の栗色の髪が子供達の歓声と共にくるくると宙に舞った。

残された翼はしっかりと空を捕らえていた。鎖につながれてない、
残された翼で。

（もう少し続きます！あと少しです！）

サル山のサルと、錯乱する象達。

「なんとなくね、この動物園の中で一番幸せじゃないかと思うのは、このサル山のサル達だと思うの」と彼女。

理由は、「自分達の置かれている状況に気づいてないっばいから」だそうだ。

彼女の主張は以下の通りだ。

・他の動物は、自分達のおかれている状況の ” 不自然さ ” になんとか気づいているように思う。

・例えば鳥。飛び立てどもすぐに柵にぶつかってしまう。例えば猛獣。襲うべき動物がいらない。

対してサル山のサルは、今置かれている現状を全く意識する事なく、あたかも『先祖代々自分達の祖先が暮らしていた場所』と、今いる場所は全く同じ場所のような雰囲気と錯覚の中で、生活しているのだ…と。

確かにそうかもしれない。

もちろん実際彼らの先祖が暮らしていた森と、今居るここのサル山はまるで違う場所だ。

ただ、他の動物達から放たれるような、 ” どころなく息苦しい感

じ、窮屈な感じ” が、このサル山を見る限り全く伝わってこない。まるで順応している。のびのびとしている。

「きっと彼らは、自分がいる場所が動物園だとは思ってない」というのが、彼女の主張だ。

なんとなく同感。

「それもひとつの幸せだと思っの」と彼女。

「自分のおかれてる状況に気づかないのも、幸せになるコツのひとつだ」って事で。

つまり、バカの方が幸せになれるって事か？

僕個人的な偏見だが、サル山のサルはどことなくバカに見える。[↑]
サル自身はもちろんバカだとは思ってないと思うが、すぐくバカのように思う。そうでなきゃ、あんな放り投げられたお菓子とか喜んで食わない。

「逆を言つと、今置かれてる状況を深く考えすぎないのも、幸せに生きるコツだとも思っの」と彼女。

僕は、ふーんと思い、しばらくサル山のサルを眺めた。

頂上に、ふんぞり返った一回り大きめなサルが見える。間違いなくボス猿。

彼は僕らを『支配下』のように見下ろす。

支配してるのは寧ろ僕らなのに。

僕らの入場料がないと、君らは即刻飢え死にだよw

「一番複雑な順応を強いられているのは、ゾウだと思うの。」と彼女。

あのサイズ、あの力、しかしそこまでバカじゃない。

彼らは今自分のおかれている状況を確実に理解はしている。その上で人間と折り合いをつけようと、ある種、妥協を強いられているような状況に置かれているように思う。

確かに窮屈そう。

あのオリのサイズでは。

「ただ、休園日には、ゾウ舎の外も散歩してるって知ってた？」と彼女。へー、そうなんだ。

ただ、たまに発狂したゾウを射殺したという海外ニュースを耳にする事がある。やっぱり耐えられない象もいるのだろう。

「ちなみにもうひとつ！日本の動物園にいる動物につけられた名前です、一番多い名前はなんでしょう？」と彼女。

「タロウ？」と僕。

「モモコだってサw」と彼女。

へー、ハナコかと思った。

ちなみに上野動物園にいるニシローランドゴリラの「モモコ」さんは2009年11月14日（土）午後6時50分ごろ、めでたくメスを出産してお母さんになったそうです！

↑

（もう少しおつきあいください！まだ続きます！）

僕はその現実を受け容れられずにいた。

写真の彼女は再び子供達にかこまれ、身動きが取れなくなっていた。この子には子供を引き寄せる何かがあるような気がする。ただ子供は容赦ないので、カメラを取るうとしたり髪の毛を引っばろうとしたりする。それでも幸せそう。この子は子供が本当に好きなんだろうなあと思う。

僕は少し離れたベンチに座って、その光景を眺めていた。

その時、視線の少し先、僕はまるで予想していなかったものを目にしたんだ。

前の彼女がそこにいた。

間違いなく、前の彼女だ。僕はしばらく状況を把握する事が出来なかった。信じたくなかった。理解したくなかった。

ただ、現実間違いなくそこにあるんだ。

間違える筈がない。別れた彼女だ。

横には今の彼氏を思われる男がいた。手をつないでいた。そして彼女の表情は、昔僕に注いでいた時の表情と同じものだった。幸せそうな表情を今は僕以外の他の誰かに向けていた。微笑んでいた。

これが現実だ。

僕が止まっても、回りの時は確実に進む。変わる。別れてから今に至るまでの時の経過。この目の前の状況が彼女の今なのだ。

僕はその現実を目の前につきつけられ、さあどうする？と問いかけられているような気分がした。

二人は園内の売店で何か選んでいた。

彼女が手にしたのは、パンダの小さいぬいぐるみ。それは以前、僕が彼女に買ってあげたのと同じものだった。そして二人はそれを持ってレジに向い、男が金を払っていた。そして嬉しそうに彼女はそれを携帯につけていた。

昔僕の前でそうしていたのと同じように。

久しぶりに晴れた日曜。ただ、まさかこんなところでバッティングするとは想像もしなかった。彼女も青空に釣られてやってきたのだろうか？

そして今の彼氏に「外へ連れてって！」とねだったのだろうか。

昔僕にしていたのと同じように。

僕は今の彼氏の顔をよく見れなかった。見れる筈がなかった。見たくなかった。
知りたくもない。背けたい。理解なんかしたくなかった。

僕は再び現実に叩き込まれたような気がした。

君はもう過去だ。君はもう不要だ。

彼女の中では、僕はもう過去の物として消し去られてしまっているのだ。もう憶えてすらいないかもしれない。

そして視線の先にいる彼女こちら側に顔を向けようとした瞬間、

僕は逃げた。その場から逃げた。

顔を下に向けて。

そして園内を後にした。逃げるしかなかった。走るしかなかった。園内にしたら再び顔を合わせてしまう可能性があるかと思ったからだ。

逃げる僕の姿を彼女は目撃していたかもしれない。ただ、そんな事どうでもよかった。僕はその場から立ち去りたかった。現実から目を背けたかった。

僕は園を後にし、そのまま池の方に向かった。不忍池だ。

どこかに腰を下ろして落ち着きたかった。そして状況を整理したかった。

ようやく開いているベンチを見つけ、僕はそこに腰を下ろした。

その時携帯が鳴った。

「コラ！」…写真の彼女だ。

「勝手に消えるなw」 ↑二通目。

そっだ、オレは写真の子にひとことも告げずにその場を立ち去ってしまったんだ。「ごめん、ちょっと急用が…」と返信した。

「ウソつけ！」と三通目。

もちろんウソだ。そんな急用に追われるヤツが動物園になんかいる筈が無い。

「昔の彼女？」と写真の彼女からメールが届いた。

あの子にも見られていたんだ。

「突然下向いて身を隠すよーに逃げ去るのなんて、昔の彼女に遭遇した時ぐらいだよw」というか、全部見てたしw」と五通目のメール。分かってたんだ。

「まだカメ見てないよ」と六通目のメール。

そうだ、カメを見てなかった・

「ごめん…」と僕は返信した。

そしてメールが止まった。

写真の彼女からの返信はなかった。

(続きます!)

風と天使と動物と。

写真の彼女からメールが届いたのは、それから一時間ほど経った後だった。

その一時間僕は何をしてたかとゆーと、ぼんやりベンチに座って鴨を眺めていた。日は傾き始めていた。

何を考えるでもなく僕は座っていた。脳が思考を拒絶していたのかもしれない。

「そのまま立ち上がって、左斜め後ろに振り返ってみるのだ！」とメールが届いた。写真の彼女からのメールだ。

振り返ったが、誰も居なかった。

「ちやう！ちやう！そのまま上を見上げる！ヘンな形したビルがそこにあるでしょ！」と再びメール。確かにヘンなビルがある。台形のブロックをそのまま上に積み上げたよーなビルだ。

「そのビルのてっぺんに今から来る事！命令！」とメールには書いてあった。

そんな遠くない。僕は重たい腰を上げ、そのままビルに向かった。

そのビルは信じられない事にエレベーターが無かった。ワリと高いビルなのに。僕は仕方なく、長い階段をひたすらに登った。

てっぺんって事は屋上か？

僕は思った。屋上って入れるんだろうか？鍵は？

かなり段数の多い階段を僕は登り切り、ようやく屋上に辿り着いた。鍵はかかってなかった。僕は扉を開けた。視界が一気に広がる。

誰もいない。

背後から声がした。

「元気だせ！」

声？

写真の子は声が出ない筈だ。けど声がしたんだ。そしてもう一度聞こえた。

「元気だせ！」

僕が振り返り見上げた先に、居た。写真の彼女が。

彼女は屋上の中にある、もう一段高い場所にいた。

平べったい屋上の上にある、ちょこんと置かれた四角い箱のような。

まあそれは長い長い階段の出口の扉の一部なんだけど。その横に小さなはしごがあつて、上まで続いてた。

彼女はそこに居たんだ。

彼女の白い服が夕日で朱色に染まり、柔らかいスカートの裾が風と踊っていた。

ふんわりと。今にも優しく浮かび上がりそうなくらいに。

？

彼女はチヨイチヨイツと、下を指さした。

彼女はその小さな建物から、ひらつと飛び降り、カメラの望遠を最大限にして僕に渡した。

カメだ。。カメが見える。。。

日が傾きかけて、ぼんやりとしか見えないが、確かにカメが見えた。
確かにカメがいた。

「約束は守れよな！」と写真の彼女からメール。すぐ隣にいる写真の彼女から。そしてもう一度声が聞こえた。

「元気だせ！」

声？

僕は彼女の方を見た。彼女は手に小さなうさぎのぬいぐるみを持っていた。大きめのキーホルダーぐらいの、手のひらにちょうど乗るぐらいのサイズの。そして背中を押す度、元気だせ！元気だせ！と声が聞こえた。

声の正体はコレだ。昔ちよつとだけ流行った録音出来るぬいぐるみだ。ただ、もう黒ずんでボロボロになっていた。

「この声はね、ワタシがまだ声を出せた頃の声。舞台女優目指して

いた頃のワタシの最後の声。」

ふわふわした彼女の重苦しい過去を、僕は突きつけられたような気がした。

僕は何も言えなかった。僕は想像した。舞台女優を目指す人間が声を失うという絶望がどれほどのものを。それまでの努力を一瞬にして無にするような残酷な現実がどれほどのものを。僕にはその一部しか想像はできない。それもほんの一部。それも想像のレベルだ。

「言う程苦しくは無いよ。」と彼女からメールが届く。僕の気持ちを見透かすように。

「このセリフの後、パタツと声が出なくなっちゃったんだ。病気で声が消えるって事は前から分かってたんだけどね。けど、このセリフまではギリギリで声が出た。どうしてもセリフだけは言いたかった。だけど、この声を最後に声が終わっちゃったんだ。この声が最後の声。ワタシの最後の声。」

僕は何も返せなかった。

「だから記念として、こうして持ち歩いているの！そして元気がなくなつた時は、この声聞いて元気だすようにしてるの！元気だせ！つて！」

僕は何も返せない。

「さっきの猿山の法則憶えてる？」と彼女。今日一日がそうだったように、僕の顔を見ながら手元だけで携帯を操作し、僕に送ってきた。

もう一通届いた。

「現状を深く考えない方が幸せになれるって」

…そうだね。彼女の現状と、今の僕の状況とでは比較にならないって事は、僕にも理解出来る。ただ、時として現状を深く考えすぎない方が幸せになれる、悲観的になり過ぎない方がいいという点では、微かに共通しているかもしれない。

比較するには対象が違い過ぎるけど。

「元氣出た？w」と彼女。

僕が「うん」とメールを返した時、彼女は再び、屋上にある一段高

い建物の上にいた。いつのまにか。

そして立ち上がり、僕の方を向いてメールを送ってきた。

「ちょっとだけ天使だろ？w」

…そうだね、ちょっとだけ天使だね。。

その時彼女の白い服が、ふわりを羽を広げた。風に舞うように。そして彼女の姿が消えた。ふわっと。空に溶け込むように。何かに吸い込まれるように。

僕は彼女にメールした。「配信不能」のメールが届いた。

僕は慌てて彼女の立っていた小さな建物に登った。そこには錆びついた古いバケツと、ぺしゃんこにつぶされた空き缶があるだけだった。

彼女は本当に消えてしまったんだ。

何かに吸い込まれるように。

-
-
-

翌週の日曜も青空だった。

ピンクの歯ブラシは、まだそこで申し訳なさそうに日の光を浴びている。

僕は捨てられなかったんだ。彼女との思い出を。楽しかった日々を。ただ、それでもいいと思ってる。僕は現状をあまり深く考え過ぎない事にしたんだ。

捨てたい時に捨てればいい。捨てたくなければ、捨てなければいい。

いつか本当に彼女の事を忘れる事が出来た時、その時、お別れすればいい。

ありがとうって。

最後に、ひとつ。。

何か悲しい事があつたら、動物園に行ってみてください。

もしかしたら天使に会えるかもしれませんよ。

[illegible]

<他にもたくさん作品があります！>

お気軽にお越しください！（＾＾）／

<http://nitiyo.sakura.ne.jp/>[↑]

トップページ

array/diary oowaku.html ↑ [ログページ](#)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2157/>

歯ブラシを捨てよう！

2010年10月10日11時29分発行